

組合士 アラカルト

協同組合連合会
日本専門店会連盟

組織部調査役 森 正一さん

変化の時代だからこそ前を向いて進む

森正一さんは協同組合連合会日本専門店会連盟（日専連）のベテラン職員であると同時に、組合士としては資格取得1年目というフレッシュマンである。このベテラン職員にして新人組合運営のプロが、組合士として組合士に何を思い、何を目指しているのかを伺った。

日専連とは

全国各都市の小売業者で組織する協同組合が構成員の日専連は、全国の小売商が時代の変化の中でも地域の活力の源であり続けられるよう、組合の存続とそのためサポートに取り組み組織である。設立は昭和11年、今年で72周年を迎える歴史と伝統ある団体である。現在の構成員は、正組合79会、準組合9会、賛助会20社（いずれも平成20年3月現在）となっている。

年會会議がある）、そしてまちづくりや地域と商業の環境整備に関連した取組、活動を行う政策活動となっている。

事務局ただ一人の組合士

これら事業を通じて全国42000会員の組合員を支援する日専連の組織と体制をがっちりサポートする事務局職員は26名（パート・派遣社員を除く）。その中で組合運営のプロである組合士は、実は森さんが第1号にして唯一の存在だ。

組合士は、総務など組合運営の実務畑に長く従事する人が挑戦して資格を取得する事例が多いが、その点では森さんは異色のキャリアの持ち主である。もともと職員としてのスタートは電算マンからで、その後15年間その業務に従事した「技術マン」出身なのである。

その後、総務部へ異動し全国大会の運営など日専連と組合に関する実務を身につける経験を9年にわたり積んだ。しかしこの時点では日々の業務に従事することに忙殺され「実は組合士という資格は全く認知していなかった」とのこと。そ

んな森さんに転機が訪れたのは平成17年、48歳の時の組織部への異動だった。

組織部という部署は3大セミナーや全国小売商サミットなどの政策活動を担当するが、そのような部門への異動をきっかけに「自身の研鑽の意味も込めて、何か資格取得に挑戦してみてもどうか」と上司から勧められたのである。

そこで森さんは組合士を挑戦の対象に選んだのだが、自らを発憤させる意味からも「成功して公表する」と決意して密かに勉強を始めたのであった。だからすべては自主勉強である。自宅も含めた業務時間をフルに活用したことは言うまでもないが、さらに昼休みも利用してコツコツと準備を進めたのである。

今、そこには何を指すのか

現在、会員として日専連は大きな転期を迎えている。最大の変化の潮流は大量販店等の台頭により、組合として日専連の基礎の基礎である小売業者が全国各地で苦戦を強いられていることである。その流れに対抗する意味も込めて、日専

連ではクレジットカード事業を展開してきているが、そのカード機能の一部である消費者金融に対する法改正がさらなる変化を迫っている。会員組織の株式会社である。

世の中の、そして経済の動きがめまぐるしく変わる中、それに対応するにはスピーディな動きが求められる。その時、人的組織である組合で対応しようとするとしてもその動きは鈍くなる。迅速性を追求するならば、株式会社化は当然の選択肢の1つとなる。「しかし、だからこそ人的組織としての組合の存在意義は、重要性を増しているし、組合はこれからも存続すべき存在だ」と森さんは言う。

そのような組合の価値を改めて認識しつつ、「株式会社化で1つ1つの組合単位ではどうしても組合運営に対する体制が手薄になります。これは覚悟せざるを得ない。それだけに、日専連が、そしてその中の組合運営のプロである組合士として法に則ったフォロワーシップを目指していきたいですね」。森さんの目は常に前を向いている。

